

## サイイダ・ザイナブ廟とシーア派参詣年表

安田 慎\*

本年表は、シリアの首都ダマスカス近郊にあるサイイダ・ザイナブ廟とシーア派参詣の歴史の変遷を扱った年表である。

サイイダ・ザイナブ廟はシリアの首都、ダマスカスの南方約10キロ、シット・ゼイナブ(もしくはカブル・シット)に位置するシリア最大級の廟の1つである。第4代カリフ(初代イマーム)アリーとファーティマの間に生まれた娘であり、ムハンマドの孫娘にあたるサイイダ・ザイナブの廟として多くの人びとの崇敬を集めてきた。現在ではイラクのアタバート、イランのコム、マシュハドと並んでシーア派にとって重要な参詣地であり、政治的にも重要な拠点の1つとなっている。しかしながら、サイイダ・ザイナブ廟に向けられる人びとの視点が常に一定であったわけではない。特にここ半世紀の傾向として、シリア国外のシーア派の人びとによる参詣(ズィヤラ)が急激に増加してきた。地域的には、イランやイラク、レバノンといったシーア派が多数存在する地域のみならず、湾岸諸国や南アジアからも数多くの人びとが参詣に訪れ、参詣形態も個人や家族単位、友人同士、団体ツアーと多様に展開している。現在では年間200万人規模の参詣者が訪れるまで拡大している。

### I. サイイダ・ザイナブとサイイダ・ザイナブ廟

残念ながら、サイイダ・ザイナブ(al-Sayyida Zaynab al-Kubrā)に関するまとまった史料は存在しない。また、歴史家や語り手たちによって数々の物語が追加され、改変され続けてきたため、精確な史実を知ることはほぼ不可能である。それを踏まえた上で、サイイダ・ザイナブの人生を大まかに追ってみたい。

サイイダ・ザイナブはアリーとファーティマの娘、ハサン、フサインの妹としてマディーナで生まれた。幼少より聡明で、明晰な判断力と豊富な知識を持った女性であった。親戚のアブドゥッラー・イブン・ジャアファル・タイヤール(‘Abd Allāh b. Ja‘far Tayyār)と結婚し、4人の息子(アリー、アウン、ムハンマド、アッバース)と1人の娘(ウンム・クルスーム)に恵まれた[al-Amīn 1986: 137]。

しかしながら、彼女の晩年は波乱に満ちたものであった。西暦680年、兄フサインやその近親者、仲間たちとともにマディーナからクーファへと向かったサイイダ・ザイナブは、カルバラーの戦いにまきこまれることとなった。時のウマイヤ朝カリフ、ヤズィードの軍隊によってフサイン一行の男性たちは虐殺され、サイイダ・ザイナブも兄フサインと息子2人(アウンとムハンマド)を失う。彼女自身も戦いの後に生き残った者たちとともに捕虜となり、ダマスカスに連行されていった。その際、彼女はクーファでは兄フサインを助けなかったクーファの民と兄を殺したイブン・ズィヤード(Ibn Ziyād)を非難し、ダマスカスでは時のウマイヤ朝カリフ、ヤズィードを痛烈に非難した[al-Amīn 1986: 137-140]。

しばらくダマスカスで幽閉されていたが、その後解放され、他の者たちとともにマディーナへ帰還した。しかしながら、その後の彼女の消息については決定的な史料が存在しないため諸説が存在

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

し、現在でも論争が続いている。

有力な説のひとつは、マディーナへ帰還した後に当地で没したとするもの。ひとつは、マディーナへ帰還後、近親者とともにエジプトの地へと渡り、カイロで没したとするもの。もうひとつは、マディーナへ帰還した後に夫とともにダマスカスに戻り、当地で没したとする説である [al-Amin 1986: 140]。現在ではカイロ説に由来するサイイダ・ザイナブ廟がカイロに、ダマスカス説に由来するサイイダ・ザイナブ廟がシット・ゼイナブに存在する。両者はともに多くの参詣者を集める参詣地となっており、現在でもその正統性をめぐっては学術・非学術を問わずにさまざまな場面で論争が続いている。

## II. サイイダ・ザイナブ廟の研究史

シリアのサイイダ・ザイナブ廟については近年のシーア派参詣者の増大に伴い、シーア派参詣者に着目する形で研究が進められている。主な問題関心は、近年シリア国外のシーア派の人びとがなぜサイイダ・ザイナブ廟に参詣するようになり、重要な参詣地となったのかという点である。ひとつの契機と考えられているのが、1980年代のサイイダ・ザイナブ廟の改修・拡張工事であり、その際シリア政府によってサイイダ・ザイナブ廟周辺部の土地が接収されたこと、イラン革命政権が改修・拡張に必要な資金を援助したことが特に注目を集めている [Calzoni 1988, 1993]。

改修・拡張工事に関連づけて参詣者の増加を説明する場合、以下3点がポイントとなってきた。①参詣者を通じたイラン革命政権のシーア派拡大政策、②シリア政府によるシリア国内の宗教統制とシーア派(もしくはアラウィー派)拡大政策、③シリア政府とイラン政府による「シーア派同士」の政治的結託がその背後にあるとする議論である [Kramer 1987; Böttcher 1997; Ababsa 2001; Pinto 2007]。1980年代以降の国際関係(いわゆる「シーア派の三日月」論)や、1990年代以降に進んでいくダマスカスやラッカといった、サイイダ・ザイナブ廟以外のシリア国内シーア派参詣地の改修・拡張工事、イランからの参詣者の増大がこの議論を補完する論拠として示されてきた。

サイイダ・ザイナブ廟を巡っては違った角度からの議論も存在する。たとえば、サイイダ・ザイナブ廟周辺にハウザや各地のシーア派ウラマーの事務所があいついで設立されたことに着目し、サイイダ・ザイナブ廟が20世紀中葉を通じて、各地のシーア派ウラマーが集まる活動拠点となり、それによって宗教的に重要な拠点の1つとしての地位を確立していったという議論がある [Mervin 1996]。他にも、1950年代から60年代にかけて行われたサイイダ・ザイナブ廟の改築運動と改築工事に着目し、地元のシーア派住民の役割を重視する議論がある [Zimney 2007]。

これらの議論は何に力点を置か一方で異なるが、シーア派の政治的・社会的台頭がサイイダ・ザイナブ廟への参詣を促進したとする点は共通している。

## III. シーア派参詣

特定の墓や聖所に向かう参詣(ズィヤーラ)自体は、時代や地域を問わずにムスリム間で広く見られる慣行であるが、シーア派参詣の特色として、歴代のイマームや彼らの近親者たちの廟への参詣が盛んである点が指摘できる。その思想的背景や歴史の変遷については、ナカシュや吉田、守川が詳しく述べている [Nakash 1993, 1994, 1995; 吉田 2004; 守川 2007]。イマーム廟への参詣は、思想的にはシーア派として最も重要な意味を持つ行為のひとつであり、現世利益のためのみならず、執り成しや罪の浄化といった来世的報酬、イマームを通じた神との対峙を期待して行われる行為である [吉田 2004]。さらに、シーア派の信仰を確認し、シーア派としての集合的記憶を確認・

強化するためにも重要な行為でもあると研究者の間では指摘されてきた [Nakash 1993, 1995; 吉田 2004]。

時代による盛衰はあるものの、イラクのアタバート（ナジャフ、カルバラー、カーズイマイン、サーマッターの4カ所）、イランのコム、マシュハド、アラビア半島のマディーナが歴史的に重要な意味を持ち、各地からの参詣者で栄えてきた。その中でも特に初代イマーム、アリーが埋葬されたナジャフと第3代イマーム、フサインが埋葬されたカルバラーはシーア派の人びとの間で絶大な人気を誇った。それに対して、シャーム地方には歴史的に、各地のシーア派が大挙して参詣に向かうほどの求心力を持った参詣地は存在しなかった。その点、近年のサイイダ・ザイナブ廟への参詣者の増大は極めて現代的な現象であると言える。

さらに現代的な現象として、マス・ツーリズム（大衆観光）との関わりがあげられる。中東全体では1970年代よりマス・ツーリズムが急激に浸透していく。ジャンボジェット機の登場や道路網の整備による交通網の拡大、旅行代理店システムの浸透による旅行者の労力とリスクの大幅な軽減、原油価格の上昇による中東経済の急激な成長は、巡礼や参詣に大きな影響を与えた。シリアの参詣地もマス・ツーリズムの影響を色濃く受けて規模を拡大している。シリア政府は1970年代以降に、強力で観光政策を推し進めていった。サイイダ・ザイナブ廟を中心としたシーア派参詣地は、政府や旅行産業の観光マーケティング戦略のなかで「宗教観光」の中核として位置づけられ、大規模な観光開発が進められていった [Gray 2001]。シリアの観光政策は現代のシーア派参詣の形態を大きく変えるきっかけとなったと言える。

#### IV. 本年表の資料

本年表は上記の先行研究を踏まえた上で、以下の資料を用いて作成している。

- ① 1968年に発行されたサイイダ・ザイナブ廟改築工事の概要と寄進者一覧の記念冊子
- ② 1996年にレバノンで発行されたシーア派系雑誌、*al-Mawsem* 誌のサイイダ・ザイナブ廟特集号
- ③ 過去の歴史家や地誌家、旅行家たちのサイイダ・ザイナブ廟に関する記述
- ④ シリアの経済・観光政策や観光産業に関する資料・研究
- ⑤ シーア派やシリアに関する著作・研究
- ⑥ シリア政府や観光産業に関するインターネット上の電子資料

#### 参考文献一覧

##### 1. 一次史料

- アジア太平洋国際観光協力センター 1998 『シルクロード地域 各国観光情報収集調査 トルコ・シリア編 報告書』
- 国際観光開発研究センター 1995 『海外観光情報収集調査 報告書 シリア・アラブ共和国』
- 国際協力事業団 1997 『シリア国 総合観光開発計画調査 事前調査報告書』
- 1998 『シリア・アラブ共和国総合観光開発計画調査 ファイナルレポート 要約版』
- 国際協力機構 2004 『開発調査実施済案件評価調査報告書』
- JICA (Japan International Cooperation Agency). 1998. *The Preparation of National Tourism Development*

*Plan in Syrian Arab Republic Final Report. Vol.3, Tokyo.*

Maqām al-Sayyida Zaynab. 1968. *Al-Bayān al-‘Āmm li-l-Hībāt wa al-Nafaqāt fī Binā’ wa Ta‘mīr al-Maqām al-Sharīf: li-ghāya 1387 h. / 1967m.* Dimashq.

## 2. 二次史料

イブン・ジュバイル 1992 『旅行記』 (藤本勝次・池田修監訳) 関西大学出版部.

イブン・バットゥータ 1996 『大旅行記 1』 (家島彦一訳) 平凡社.

大塚和夫・小杉泰・小松久男他編 2002 『岩波イスラーム辞典』 岩波書店.

黒田美代子 1999 「現代シリアの経済開発と政治・経済」 『駒沢女子大学研究紀要』 6, pp.29-42.

桜井啓子 2007 『シリア派：台頭するイスラーム少数派』 中公新書.

守川知子 2007 『シリア派聖地参詣の研究』 京都大学出版会.

吉田京子 2004 「十二イマーム・シリア廟参詣の理論的側面」 『宗教研究』 341, pp.207-228.

Aghaie, K.S. 2001. “The Karbala Narrative in Shi’i Political Discourse in Modern Iran in the 1960s-70s,” *The Journal of Islamic Studies* 12(2), pp. 151-176.

———. 2004. *The Martyr of Karbala: Shi’i Symbols and Rituals in Modern Iran.* Seattle: University of Washington Press.

——— ed. 2005. *The Women of Karbala: Ritual Performance and Symbolic Discourses in Modern Shi’i Islam.* Austin: Texas University Press.

Ajami, F. 1986. *The Vanished Imam: Musa al Sadr and Shia of Lebanon.* Cornell: Cornell University Press.

Allen, H.B. 1954. “The Rural Factor: A Paper Presented to the Colloquium on Islamic Culture,” *The Muslim World* 44 (3-4), pp. 171-180.

Ababsa, M. 2001. “Les mausolées invisibles: Raqqa, ville de pèlerinage chiite ou pôle étatique en Jazira syrienne?” *Annales de Géographie* 622, pp. 647-664.

Al-Amīn, M. 1986. *A yān al-Shī’a.* vol.7, Bayrūt: Dar al-Ta‘āruf li-l-Maṭbū‘āt.

———. 2000. *Strat al-Sayyid Muḥsin al-Amīn.* edited by Haytham al-Amīn and Sabrina Mervin. Bayrūt.

Böttcher, A. 1997. “Le ministère des Waqfs,” *Monde Arabe Maghreb Machrek* 158, pp. 18-30.

Calzoni, I. 1988. *Sayyida Zaynab. Notizie testimonianze dati sul suo mausoleo a Damasco,* Università degli studi di Venezia.

———. 1993. “Shiite Mausoleums in Syria with Particular Reference to Sayyida Zaynab’s Mausoleum,” *Academia Nazionale dei Lincei* 224, pp. 191-201.

Gray, M. 2001. “Political Transformation, Economic Reform, and Tourism in Syria,” in Y. Apostolopoulos, P. Loukissas & L. Leontidou eds., *Mediterranean Tourism: Facets of Socioeconomic Development and Cultural Change,* London & New York: Routledge, pp. 129-145.

Al-Harawī, ‘Alī ibn Abī Bakr. 2004. *A Lonely Wayfarer’s Guide to Pilgrimage: ‘Alī ibn Abī Bakr al-Harawī’s ‘Kitāb al-Ishārāt ilā Ma’rifat al-Ziyārāt’.* tr. J. W. Meri. Princeton.

Hourani, A. 1986. “From Jabal ‘Āmil to Persia,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 49 (1), pp. 133-140.

Ibn ‘Asākir. 1959. *La description de Damas d’Ibn ‘Asākir.* tr. Nikita Elisséeff. Damas.

Ibn Shaddād. 1956. *La description de Damas d’Ibn Shaddād.* ed. Sami Dahan, Damas.

- Kramer, M. 1987. "Syria's Alawis and Shi'ism", in M. Kramer ed., *Shi'ism, Resistance, and Revolution*, pp. 237-54.
- Mervin, S. 1996. "Sayyida Zaynab, Banlieue de Damas ou nouvelle ville sainte chiite?," *CEMOTI* 22, pp. 149-162.
- Murtaḍā, M.R. 1996. "Tārīkh al-Banā'ī fī Maqām al-Sayyida Zaynab 'alay-hi al-Salām," in M.S. Ṭurayhī ed. 1996. *Al-Mawsem* 25, Bayrūt: Al-Maktaba al-Malikīya, pp. 137-152.
- Al-Nābulusī, 'Abd al-Ghanī ibn Ismā'īl. 1986. *Al-Ḥaqqīqa wa al-Majāz fī al-riḥla ilā bilād al-Shām wa Miṣr wa al-Hijāz*. Qāhira.
- Nakash, Y. 1993. "An Attempt to Trace the Origin of the Rituals of 'Āshūrā'," *Die Welt des Islams: International Journal for the Study of Modern Islam* 33, pp. 161-181.
- . 1994. *The Shi'is of Iraq*. New Jersey: Princeton University Press.
- . 1995. "The Visitation of the Shrines of the Imams and the Shi'i Mujtahids in the Early Twenties Century," *Studia Islamica* 81, pp. 153-164.
- Al-Nu'aymī. 1948-50. *Al-Dāris fī Tarīkh al-Madāris*. 2 vols. ed. Ja'far al-Ḥasanī. Dimashq.
- Al-Omar, M. 2005. *The Shrine of Sayeda Zainab*. Damascus.
- Perthes, V. 1991. "A Look at Syria's Upper Class: The Bourgeoisie and the Ba'th," *Middle East Report* 170, pp. 31-37.
- . 1992. "The Syrian Private Industrial and Commercial Sectors and the State," *International Journal of Middle East Studies* 24 (2), pp. 207-230.
- Pinto, G.P. 2007. "Pilgrimage, Commodities, and Religious Objectification: The Making of Transnational Shiism between Iran and Syria," *Comparative Studies of South Asia, Africa and The Middle East* 27(1), pp. 109-125.
- Pölling, S. 1994. "Investment Law No.10: Which Future for the Private Sector?" in E. Kienle ed., *Contemporary Syria: Liberalization between Cold War and Cold Peace*, London: British Academic Press, pp. 14-25.
- Sharaf al-Dīn al-Āmilī, A.H. 2005. *al-Sayyida Zaynab fī tārikh al-islām*. Dimashq: Maktab al-Imām al-Khāmeinī.
- Ṭurayhī, M.S. ed. 1996. *Al-Mawsem* 25. Bayrūt: Al-Maktaba al-Malikīya.
- Yāqūt al-Rūmī. 1995. *Mu'jam al-Buldān*. Tome 3. Bayrūt: Dār Ṣādir.
- Zimney, M. 2007. "History in the Making: The Sayyida Zaynab shrine in Damascus," *ARAM* 19, pp. 695-703.

### 3. オンライン文献

- シリア・アラブ共和国観光省ホームページ . <http://www.syriatourism.org/> (2009年2月10日閲覧)
- ナッハース観光旅行会社ホームページ . <http://www.nahastt.net/> (2009年2月10日閲覧)
- ナッハース・エンタープライズ・グループ ホームページ . <http://www.nahas-group.com/> (2009年2月10日閲覧)
- シャーム・パレス・ホテル・グループ ホームページ . <http://www.chamhotels.com/> (2009年2月10日閲覧)
- サイイダ・ザイナブ観光・参詣会社ホームページ . [http://www.nahas-group.com/english/index.php?page=category&category\\_id=94](http://www.nahas-group.com/english/index.php?page=category&category_id=94) (2009年2月10日閲覧)

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
627			ザイナブ (al-Sayyida Zaynab al-Kubrā) 誕生 (マディーナにて) ・後の第4代カリフ (初代イマーム)、アリーと預言者ムハンマドの娘、ファーティマの間に生まれる [al-Amīn 1986: 137]
632			預言者ムハンマド死亡 ・アブー・バクルが初代カリフに就任
636		ハーリド・イブン・ワリードによるシリア征服 ・ビザンツ帝国の支配下にあったシリア、イスラーム王朝の支配下に入る	
661		ダマスカスがウマイヤ朝の首都となる	第4代カリフ、アリー死亡 ・ムアウウィヤがカリフを受け継ぎ、ウマイヤ朝が成立 (~750)
680			ムアウウィヤ死去 ・カリフに息子のヤズィードが即位 (~683) 第3代イマーム・フサイン、近親者と仲間を連れてマディーナからクーファに向かう [al-Amīn 1986: 137-138]
			カルバラの戦い ・イマーム・フサイン一団、アリー・ザイヌルアービディーンと女性、子どもたちを除いてイブン・ズィヤードの軍に虐殺される ・ザイナブは生き残った者達と共にイブン・ズィヤードの捕虜となり、ダマスカスに連行される ・ダマスカスへ連行される最中、クーファでイブン・ズィヤードとフサインを助けなかったクーファの民をザイナブが非難 ・ダマスカスにおいてザイナブ、ウマイヤ朝カリフ・ヤズィードを批判 ・逗留されていたザイナブと他の捕虜たちが解放、一同マディーナへと帰還 ・帰還後、ザイナブは夫のアブドゥッラー・イブン・ジャアファル・タイヤールと共にダマスカスに移住したとされる [al-Amīn 1986: 138-140]
685	ザイナブ死亡 (ダマスカス郊外、ラーウィヤ村にて) ・ザイナブの墓が現在のサイイダ・ザイナブの位置に設けられる [al-Mawsem 1996: 9]		ザイナブ死亡
712			第4代イマーム、アリー・ザイヌルアービディーン死亡
750			ウマイヤ朝が滅亡し、アッバース朝成立

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
765			第6代イマーム、ジャアファル・サーディクがマディーナにて死亡 ・マディーナのパキーク墓地に埋葬される ・彼の生存中にアーシューラーやアルバイーンの儀礼、同日のカルバラーへの参詣の慣行が形成されていった ・死後イマーム位を巡って論争が起き、イスマーイル派が分派 [Nakash 1995; 桜井 2007]
799			第7代イマーム、ムーサー・カーズィム死亡
816-17			第8代イマーム、アリー・リダーの妹、ファーティマ(ファージェメ)が現在のコムで死亡
818			第8代イマーム、アリー・リダー、ホラーサーン地方のトゥースで死亡、遺体は南20キロのマシュハドに埋葬される
874			第11代イマーム、ハサン・アスカリー死亡 ・第12代イマーム、マフディーのガイバ(小ガイバ)
909			ファーティマ朝、チュニジアにて成立(～1171)
932			ブワイフ朝成立(～1062)
940			大ガイバの始まり
946			ブワイフ朝によるバグダード占領 ・アッバース朝カリフより「大アミール」の称が与えられる ・以後、イマームや近親者の廟の建設や整備とその地への参詣、アーシューラー・アルバイーンといったシーア派独自の宗教行事、シーア派の学問が隆盛を極める [桜井 2007: 36-37]
969		ファーティマ朝による南シリア征服 ・それまで諸勢力が混在していた南シリア地方が統一される ・アレppoを中心とした北シリアは諸王朝が乱立する時代が続く	
1038			セルジューク朝成立
1076		セルジューク朝によるシリア征服	
1096		第1回十字軍 ・以後シリアはイスラーム勢力とキリスト教勢力による勢力争いの場となる	第1回十字軍、エルサレムを攻略
1104		ブーリー朝によるダマスカス支配	
1106	ダマスカスの歴史家、イブン・アサーキル(Ibn 'Asākir)による記述 ・アレppo出身のカルクービー(Qarqūbī)によって現在のザイナブ廟の位置にウナム・クルスームのモスクと廟が建立される		

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1106	・ヤークウト (Yāqūt) も同じ記述をしている [Ibn 'Asākir 1959: 142-143; Yāqūt 1995: 733]		
1127			ザンギー朝イラクで成立 (~1174) ・後にシリア全土に支配を広げていく
1169			サラーフッディーンによりエジプトにアイユーブ朝成立
1174		ザンギー朝君主、ヌールッディーン死去 ・以後サラーフッディーンのアイユーブ朝がシリアを支配する	
1214-15	スーフィー、ハラウィー (al-Harawī) による参詣・ザイナブ廟に関する記述 ・ウンム・クルスームの墓と記述するが、系譜についてはムハンマドの子孫とのみ記述されている [al-Harawī 2004: 26]		
1217-18	アンダルスの旅行家、イブン・ジュバイル (Ibn Jubayr) によるザイナブ廟の参詣・記述 ・フサインの娘、ウンム・クルスーム (小ザイナブ) と記述されている [イブン・ジュバイル 1992: 280-281]		
13c 中葉	ダマスカスの地誌家、イブン・シャッダード (Ibn Shaddād) による記述 ・イブン・アサーキル、ハラウィーの記述に準拠した内容 [Ibn Shaddād 1956: 134]		
1250			マムルーク朝成立 (~1516)
1258			モンゴル軍によるバグダード攻略 ・アッバース朝滅亡
1260		シリア、マムルーク朝の支配下に入る	
1281		ホムスでマムルーク朝、モンゴル軍を撃退	
1299			オスマン朝成立 (~1922)
1326	アンダルスの旅行家、イブン・バットゥータ (Ibn Baṭṭūṭa) による記述 [イブン・バットゥータ 1996: 272-273]		
1366	地元の有力者、ムルタダー家 (第7代イマーム、ムーサー・カーズィムの子孫) によってワクフが設定される ・バールベックのムフティー、フサイン・イブン・ムーサー・イブン・アリー・フサイニー・シャーフイイー (Ḥusayn b. Mūsā b. 'Alī al-Ḥusaynī al-Shāfi'ī) による記述 ・”al-Sayyida al-Khālida Umm Kulthūm Zaynab al-Kubrā (ウンム・クルスーム・大ザイナブ)” と記述されている		



西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1366	(1366年 続き) ・以後現在までムルタダー家が廟の管理人職を継承 [al-Mawsem 1996; Zimney 2007: 696]		
1453			オスマン朝によるコンスタンティノープル攻略 ・以後オスマン朝の首都、イスタンブールとして栄える
1501			イランにてサファヴィー朝成立 ・首都イスファハーン ・ジャバル・アーミル地方(現在の南レバノン)よりシーア派ウラマーを多数呼び寄せ、イランのシーア派化を進めていく [Hourani 1986]
1516		オスマン朝によるシリア征服・支配 ・同年にマムルーク朝滅亡	
1535			オスマン朝によるバグダード征服 ・以後イランのサファヴィー朝、カージャール朝との間で領土を巡っての争いが続く (~1823) [Nakash 1994]
16c	ダマスカスの地誌家、ヌアイミー(Nu'aymī) による記述 ・イブン・アサーキルの記述に準拠した内容 [Nu'aymī 1988: 340] 旅行者、ハウラーニー(al-Hawrānī) による記述 ・「ザイナブ・ウンム・クルスム」(ザイナブの妹)の墓との記述あり [al-Hawrānī 2001: 280, 281]		
1722			アフガン軍によるイスファハーン占領 ・サファヴィー朝崩壊 ・シーア派の中心地がイスファハーンからイラクに移る [Nakash 1994]
1776	ダマスカスの学者、ナーブルスィー(‘Abd al-Ghanī ibn Ismā‘īl al-Nābulusī) による記述 ・「シット・ゼイナブの墓」の名前が記述される [al-Nābulusī 1995: 215]		
1796			カージャール朝がイランで成立 (~1925)
1802			ワッハーブ派によるカルバラ攻撃
1823			第一次エルズルム条約(カージャール朝-オスマン朝間) ・両国間の領土争いに一応の決着をみる ・条約締結に伴い両国間の安全が確保され、以後参詣者が徐々に増大していく

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1823			・ 同時期、南アジア、中央アジアのシーア派も盛んにアタバートへの参詣を行い、20世紀初頭まで最盛期を迎えた。 [Nakash 1994: 164; 守川 2007: 163]
1832			イラクにおいてアーシューラー、アルバイーン行事が解禁 ・ それ以前は公共の場で行うことが禁止されていた [Nakash 1994: 144]
1840	ムーサー・ムルタダー (Mūsā Murtaḍā) が廟の管理職に就任し、廟が改修される [Murtaḍā 1996: 137]		
1847			第二次エルズルム条約 (カージャール朝-オスマン朝間) [守川 2007: 47, 350-351]
1867		ムフスイン・アミーン、南レバノンで誕生	
1870	サリーム・ムルタダー (Ṣarīm Murtaḍā) が廟の管理職に就任。後に彼の2人の息子 (アッパース・ムルタダー、リダー・ムルタダー) が管理人職に就く [al-Mawsem 1996: 137]		
	廟の天井が崩落し、新たに天井を設置する。石と煉瓦、木でできた廟に改築される [al-Omar 2005]		
1884-85	ダマスカスの有力者、ウスマーニー・アブドゥルアズィーズ・ハーン (‘Uthmānī ‘Abd al-‘Azīz Khān) によってクッバが修復される [Murtaḍā 1996: 148]		
1901		ナジャフより南レバノン出身のシーア派ウラマー、ムフスイン・アミーン (Muḥsin al-Amīn al-‘Āmilī) がダマスカスに移住 ・ 当時シット・ゼイナブに集まっていたダマスカスのシーア派住民の要請による ・ 以後当地方の最も権威あるウラマーとしてダマスカスを中心に活動する [al-Amīn 2001]	
1903	管理人の1人、リダー・ムルタダー (Riḍā Murtaḍā) が死亡したのにもない、息子のマフディー・ムルタダー (Mahdī Murtaḍā) が管理人職を継ぐ [al-Mawsem 1996]		
1914			第一次世界大戦勃発
1916			サイクス・ピコ協定 (5月) ・ イギリス、フランス間の戦後のシリア分割に関する秘密協定 ・ ヨルダン、南パレスティナをイギリスに、レバノン、シリアをフランスの委任統治とした

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1918	シーア派商人、ハーッジュ・マフディー・ベフバハーニー (Hājī Mahdī Behbahānī) とレバノンのシーア派ウラマー、アブドゥルフサイン・シャラフッディーン (‘Abd al-Husayn Sharaf al-Dīn) によるザイナブ廟改築を訴える集会在ザイナブ廟にて開催される [Sharaf al-Dīn 2005: 55-58]	ファイサル・イブン・フサインによるシリア王国建国	第一次世界大戦終結
1920		フランス軍によってシリア王国崩壊 ・フランスの委任統治下に入る アブドゥルフサイン・シャラフッディーンによる南レバノンでの抗仏反乱、鎮圧される [Ajami 1986: 43]	
1921			イラク、イギリスの支援によりファイサル・イブン・フサインを国王とする王制となる ・シーア派の力を削ぐ政策を展開していく、それに伴い、アタバート参詣は徐々に衰退していく [Nakash 1994]
1922			ケマル・アタチュルクによってスルタン制廃止 ・オスマン帝国崩壊 ハーエリー・ヤズディーがフェイズイーイエ宗教学院再建のためにコムに招聘される ・以後各地から多くの学生が集まるようになった。これに伴い、徐々にシーア派の学問の中心地がナジャフからコムに移っていく [桜井 2007: 122-123]
1925		シリアにおいて対仏反乱	イランにパフラヴィー朝成立(～1979) ・以後イラン国内にあったコム、マシュハドへの参詣が推奨され、アタバートへの参詣は減少していく [守川 2007] アブドゥルアズィース・イブン・サウードによるマッカ・マディーナ征服 ・バキール墓地の廟が全て破壊される
1930	アーガー・ハーン三世の母、ビービー・シャムスルムルーク (Bībī Shams al-Mulūk) による寄進によって周辺部の道路が舗装される [al-Mawsem 1996: 202]		
1932	ハーッジュ・マフディー・ベフバハーニーによってクツバが修復される [al-Mawsem 1996: 202]		イラク、イギリスの委任統治から独立

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1935	<p>ダマスカスのシーア派の名家、ニザーム家のカーミル・ニザーム (Kāmil Nizām) とムハンマド・アリー・ニザーム (Muḥammad ‘Alī Nizām) の寄進によって廟の入口部分の部屋が建築される [Murtaḍā 1996: 137; Mervin 1996]</p> <p>シット・ゼイナブの住民、ハーτζジュ・ライース (Hājj Ra’īs) と父親のハーτζジュ・ムシール (Hājj Mushīr) によって窓が新しくされる [al-Mawsem 1996: 202]</p>		<p>イラクにおいて参詣都市で外国人が商売を行うことを禁止。更に、アーシューラー、アルバイーンを公共空間で行うことを禁止する。それにともない、参詣都市の衰退がさらに進んでいく [Nakash 1994: 172]</p>
1936		フランスとの独立の協定締結	
1938	<p>ザイナブ廟の近くに墓地が建築される [al-Mawsem 1996: 254]</p>		
1939			第二次世界大戦勃発
1940	<p>新たに部屋が6つ建設される [Murtaḍā 1996: 148]</p>		
1943		シリア・アラブ共和国、独立宣言 ・初代大統領、ターワトリー レバノン共和国、独立宣言	
1945	<p>管理人の1人、マフディー・ムルタダー死亡 ・息子のムハンマド・リダー・ムルタダー (Muḥammad Riḍā Murtaḍā) が管理人職を継ぐ [al-Mawsem 1996]</p>		第二次世界大戦終結
1946	<p>管理人の1人、アッバース・ムルタダー (‘Abbās Murtaḍā) 死亡 ・息子のムフサイン・ムルタダー (Muḥsin Murtaḍā) が管理人職を継ぐ [al-Mawsem 1996]</p>	<p>シリア、レバノンがフランスの委任統治より完全に独立 ・シリア・アラブ共和国 / レバノン共和国成立</p>	<p>ハサン・イスファハーニー死亡 ・以後シーア派の学問の中心がコムへ移動していく [Nakash 1994: 88]</p>
1948	<p>イブラーヒーム・ウルワーン (Ibrāhīm ‘Ulwān) によるミナレットの寄進 [Murtaḍā 1996: 137]</p>		<p>第一次中東戦争 ・大量のパレスティナ難民の発生、周辺諸国に流れ込む パキスタン・ラホールにて全パキスタン・シーア派会議 (APSC)、シーア派権利保護協会 (ITHS) 結成 [桜井 2007: 136]</p>

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1949	<p>パレスティナ難民がザイナブ廟周辺に流れ込む [Mervin 1996]</p> <p>アレンによる記述 ・年間数千人の参詣者が訪れる参詣地 ・廟の中は狭すぎて、数十人しか入れなかった [Allen 1950: 174]</p>	<p>シリア、第一次中東戦争に伴いパレスティナ難民が大量に流入 [Mervin 1996]</p> <p>ザーイム大佐による軍事クーデター</p>	
1950	<p>ムフスイン・アミンがザイナブ廟改築への支援を要請するファトワーを発し、改築委員会設立の呼びかけを行う [Maqām al-Sayyida Zaynab 1968: 22]</p> <p>年間 10 万人規模の参詣者が来訪 [Zimney 2007: 699]</p>		
1952	<p>ムフスイン・アミンの葬儀がシット・ゼイナブにて行われる ・ムフスイン・アミンの墓がザイナブ廟の回廊部分に建設される [al-Mawsem 1996: 269-278]</p> <p>ザイナブ廟改築委員会設立 ・委員会メンバー ・サイイド・アッバース・ムルタダー (Sayyid ‘Abbās Murtaḍā) ・ハーッジュ・マフディー・ベフバハーニー (Hājj Mahdī Behbahānī) ・サイイド・ナスィーブ・ムルタダー (Sayyid Nasīb Murtaḍā) ・アブドゥルアズィーズ・シャマアト (‘Abd al-‘Azīz Shama‘at) ・サイイド・ムフスイン・ムルタダー (Sayyid Muḥsin Murtaḍā) ・ムハンマド・リダー・ムルタダー (Muḥammad Riḍā Murtaḍā) [Maqām al-Sayyida Zaynab 1968: Murtaḍā 1996]</p>	<p>ムフスイン・アミン死亡 [al-Mawsem 1996: 269-278]</p>	
1953	<p>ザイナブ廟の北東に新たな墓地が建設される [al-Mawsem 1996: 254]</p>		
1954	<p>「イランの若者からの贈り物」と言われるダリール (棺) が寄進される [Mervin 1996]</p> <p>廟と回廊部分の改築工事開始 [Murtaḍā 1996: 148]</p>		
1955	<p>パキスタンのカラチ出身の商人、ムハンマド・アリー・ハビーブ (Muḥammad ‘Alī Ḥabīb) より、ダリールの囲いの柵が寄進される [al-Mawsem 1996: 256]</p> <p>シット・ゼイナブに発電所建設 ・ザイナブ廟にも電気設備が整備される [al-Mawsem 1996: 255]</p>		

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1955	この年と翌年にかけ、以下のシーア派ウラマーがザイナブ廟改築への支援を呼びかける ・アブドゥルフサイン・シャラフッディーン (レバノン) ・ムフスィン・ハキーム (イラク) ・ボルージェルディー (イラン) ・シャリーアトマダーリー (イラン) [Maqām al-Sayyida Zaynab 1968]		
1957		シリア、法令 401 号制定 ・旅行ガイドに関する規則・規定を明記 [JICA 1998: 70] シリア、法令 458 号制定 ・旅行業務・旅行代理店に関する規則・規制を明記 [JICA 1998: 70]	
1958		シリア、エジプトと連合し、アラブ連合共和国樹立	
1959	廟の改築完了 [Mervin 1996]	レバノンのシーア派指導者、アブドゥルフサイン・シャラフッディーン死亡 ・イランのコムよりムーサー・サドルが南レバノンのシーア派コミュニティのリーダーとして招聘される [Ajami 1986: 44]	
1960	ムハンマド・アリー・ハビーブより寄進されたダリールの囲いの柵が廟に設置される [Murtadā 1996: 145] イラン人実業家より、金属製の門が寄進される ・廟の西側に設置される [Murtadā 1996: 145]		
1961		シリア、エジプトとのアラブ連合共和国を解消 ・シリア・アラブ共和国として再独立	
1963		シリア、クーデターによるバアス党政権樹立 (3月8日) ・ルアイユ・アタースィーが大統領に ・以後土地改革と工業・商業の国有化の推進 [黒田 1999: 30] シリア、法令 775 号制定 ・シリア旅行者・旅行代理店協会 (SATTA / Syrian Association of Tourists & Travel Agents) の設置 ・この時期に徐々に増えつつあった観光客と、観光客を相手にする旅行代理店の統括を目的とする ・SATTA のメンバーに登録されることなしにはシリア内での営業活動ができないことが法によって義務づけられている	

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1963		(シリア、法令 775 号制定 続き) ・ SATTA の役割 ・ メンバー各社のサービス向上 ・ 関係業法の遵守の指導・徹底 ・ 業界内のトラブル処理 ・ 国際観光振興のための諸活動 [アジア太平洋観光交流センター 1998]	
			イラン、白色革命 ・ ホメイニー、政府により逮捕・投獄 ・ 翌年国外追放される、国外で活動を続ける (～ 1979) [桜井 2007: 104]
1964	廟と回廊部分の改築工事終了 [Murtaḍā 1996: 148]		
1965		ダマスカス出身のシーア派の資本家、サーイブ・ナッハース (Ṣā'ib Naḥḥās) によって「ナハース旅行観光会社」が設立される ・ 自動車レンタル、航空券の販売業務、欧米のツアー客を相手とした観光ガイドを行っていた [Gray 2001: 137]	
1966	ザイナブ廟改築の式典 [Maqām al-Sayyida Zaynab 1968: al-Mawsem 1996] コリン・サブロンによる記述 [Thubron 1967: 89-90] ・ シーア派の参詣客で栄える主要な参詣地として記述		
		シリア、観光公共機関の設立 ・ 増えるシリアへの観光客に対応する為、観光に関する業務を取り仕切る [JICA 1998: 76]	
1967	パレスティナ、ゴラン高原からの難民の流入 (当地域の 14% の人口に相当) [Mervin 1996]	シリア、ゴラン高原をイスラエルに占領される ・ 国連の監視団による統治が始まる	第三次中東戦争 ・ イスラエル、ヨルダン川西岸、ゴラン高原、シナイ半島を占領
1968			イラクにてバアス党政権樹立 ・ 大統領、バクル サーリヒー・ナジャフアーバーディーによる『永遠の殉教者』出版 ・ これ以後イランを中心に、カルバラーの物語に関する解釈を巡って様々な議論が湧き起こり、カルバラーの物語が政治性を帯びていく (アーレ・アフマド、アリー・シャリーアティー、マルチザー・ムタッハリイといった人物が関わる) ・ 議論の中で、フサインとザイナブの捉え方が変容する。従来の宗教的重要性に加え、政治的・社会的な重要性がカルバラーの物語に付加され、その中で特にザイナブの人气が高まっていく [Aghaie 2001, 2004; Aghaie ed. 2005]

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1969	ザイナブ廟にクリニックが設立される [al-Mawsem 1996: 254]		
	ザイナブ廟改築記念式典がワクフ省大臣を招聘の上に行われる [al-Mawsem 1996: 266]		イラクにおいてサイイド・ハサン・シーラーズィーが逮捕される [桜井 2007: 120]
1970	ザイナブ廟改築計画が終了・外装・内装をイラン風に改装する改修工事開始 [Murtaḍā 1996: 145, 148]	シリアでハーフェズ・アサドによるクーデター (11月) ・アフマド・ハティーブが大統領職に就任 ・従来の社会主義から国家資本主義へと方向を転換。以後の改革は「第一次門戸開放」と言われる (~81) ・従来の社会主義経済から、民間セクターの導入による自由主義経済の一部導入、国内経済を国際的に開く方向に政策が転換する [Gray 2001: 130]	
			サイイド・ハサン・シーラーズィー、イラクから追放 ・以後レバノンを中心に活動を続ける [桜井 2007: 120]
1971		シリア、ハーフェズ・アサド、大統領職に就任	
1972		シリア、観光省設立 (法令 41号による) ・1966年に設立された観光公共機関を拡大したもの ・観光政策・観光計画の立案、観光振興、国営ホテルの建設、ホテルの等級づけと基準の作成及び観光産業の人材の育成 [国際観光開発研究センター 1994: 22; JICA 1998: 76]	
		シリア、観光審議会 (The Supreme Counsel for Tourism) が設立 ・法令 41号によって観光省と同時に設立 ・総務省の下部審議会。首相を議長とし、観光大臣を副議長とする。他のメンバーは、文化大臣、配給・通産大臣、内務大臣、総務大臣、財務大臣、経済・通産大臣、運輸大臣、情報大臣である。 ・シリアの観光政策を決定するメンバーが集まるシリアの観光政策の最高意志決定機関 ・年8-12回の定例会議が行われ、観光政策について話し合われる [JICA 1998: 82]	



西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1973			第四次中東戦争(10月6日～23日) ・オイルショックの発生、以後原油価格が上昇
	ハウザ・ザイナビーヤの設立 ・イラク人ムジュタヒド、サイイド・ハサン・シーラーズイー (Sayyid Hasan Sirāzi) による ・湾岸諸国のシーア派が資金援助を行う [Mervin 1996]		
1974		法令 20 号 ・サイイダ・ザイナブ廟に関する法令 ・1979 年制定の法令 995 号と関連する [Ababsa 2001: 650]	
		シリア、観光審議会より「全国観光開発計画」が発表される ・2000 年までのシリアの観光政策に関するマスター・プラン ・ラタキアを中心とした地中海側の海洋性リゾート開発に主眼が置かれていた ・フランスのコンサルタント会社により策定された ・観光審議会決議 43 号によってシリアの観光政策の指針となる [国際協力事業団 1996; JICA 1998: 55]	
			イラク政府により、アタバートへの参詣が規制される [桜井 2007: 116]
1975		シリア、レバノン内戦に介入 (～2005 まで軍駐留)	レバノン内戦勃発
1976		シリア、ダマスカスにホテル訓練センター (Hotel Training Center in Damascus) を設立 ・高卒を対象に、ホテル産業の人材育成の為に設置されたホテル教育機関 ・ILO、UNWTO (世界観光機関) の協力で設立 [国際協力事業団 1996: 34]	
1977		サーイブ・ナッハース、ウスマーン・アーイディー (‘Uthmān ‘Ā’idī) がシリア政府によって一時的に投獄される [Perthes 1992: 215]	
			イラクのカルバラーにおいて、シーア派信徒と政府軍が衝突。以後、バアス党政権によるシーア派の弾圧が強まる [桜井 2007: 116]
		シリア、法令 56 号 (12 月) ・ウスマーン・アーイディーによるシリアホテル・観光施設株式会社 (Arab Syrian Company for Touristic Establishment / ASCTE) の設立 ・政府とアーイディーの出資による合弁会社。政府が会社資産の 25% を保有する	

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1977		(シリア、法令 56 号 続き) ・ホテル産業の建設・管理・運営を主に行う [Perthes 1992: 215; Gay 2001]	アリー・シャリーアティー、ロンドンで客死 ・イランで数々の反王制の講演会を行い、人気を博した ・ナジャファーバーディー以降のカルバラーの物語の再解釈を受け継ぎ、抵抗運動・革命と結びつける。「フサインのように死に、ザイナブのように生きよ」とのスローガンと共に急激に彼の解釈は広まっていった ・彼の遺体は後にサイイダ・ザイナブ廟近くに埋葬される [Kramer 1987; Aghaie 2001, 2004]
1978		シリア、法令 41 号 (7月) ・サーイブ・ナッハースを主とするシリア輸送・観光マーケティング会社 (Syrian Transport and Tourism Marketing Company / TRANSTOUR) の設立 ・政府とナッハース・グループによる合弁会社。政府が会社資産の 25% を保有する合弁会社 ・観光マーケティングと観光開発・観光客の輸送を行う [Gay 2001; アジア太平洋観光交流センター 1998]	
1979			イラン革命 (2月11日) ・バフラヴィー朝が倒れ、ホメイニーを中心とした暫定政府樹立
	ザイナブ廟周辺の 30 万 m <sup>2</sup> の土地が接収 (5月20日) ・ザイナブ廟と周辺部の改修工事開始 ・サイイダ・ザイナブ廟管理委員会にイラン政府から 150000 シリア・ポンドの援助が行われる [Ababsa 2001: 650; al-Omar 2005]	シリア、法令 995 号 (5月11日) ・政府がザイナブ廟の周辺地を接収、TRANSTOUR が周辺部のデザインから観光インフラ整備まで一手に担う ・ワクフ省、住宅省の協力の下に計画が進む [Mervin 1996; Gray 2001: 137; al-Omar 2005]	マッカ事件 (11月20日) ・武装勢力によるカアバ神殿占領。サウジ当局によって鎮圧されたものの、双方に多数の死傷者
			ソ連、アフガニスタン侵攻 (12月 / ~1989)
1980			イラン-イラク戦争勃発 (9月 / ~1988)
			イラクにてバーキル・サドル処刑
1982	ホメイニーの事務所がサイイダ・ザイナブ廟周辺に設立 [Mervin 1996]		
		シリア軍によるハマー爆撃 (2月) ・活発になっていたムスリム同胞団勢力をシリア国内から一掃する	

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1982		イスラエルによる南レバノン侵攻 レバノンにてヒズブッラー結成 ・南レバノンに侵攻してきたイスラエルへの抵抗が目的	
1983		シャーム・パレス・ホテル・グループがシリアで設立 ・ASCTEの傘下会社 ・シリア全土の観光地に展開していき、ホテル業界の牽引的役割を担うようになる [Gray 2001]	
1984		アブドゥルラフマーン・アッタール ('Abd al-Rahmān 'Attār) を筆頭としたオリエント・ツアーズがシリアで設立 ・政府が25%の資産保有を行う合併会社 [Pölling 1994: 17]	
1985	ザイナブ廟の改修工事の一部完成 ・廟の外装・内装改修工事終了 ・廟の横に礼拝所を新たに建築開始 ・ミナレットの1本目完成 [Murtadā 1996: 148]		
1986		シリア経済危機 ・経済危機に伴い、第二次門戸開放を開始 [Gray 2001: 134]  シリア、観光審議会決議186号(4月) ・以下の優遇措置が観光産業に認められる ①観光産業事業に必要な資材の輸入の際に手続きを省略できる ②税金や法律の面で様々な特例が設けられる ・この決議に伴い、ホテル業とツアー会社が大幅に増大 [Gray 2001: 135]	
1987	管理人、ムフサイン・ムルタダー死亡 ・ムフサイン・ムルタダーの息子、ハーニー・ムルタダー (Hānī Murtadā) が管理人職に	ダマスカスにホーゲル観光学機関 (Hogel Institute for Tourism Sciences in Damascus) が設立 ・高等教育省の監督の下に運営されている観光教育機関 ・2年間の教育と1年間の研修を行う ・同様の機関がアレppoとラタキアにできる [国際協力事業団 1996: 34]  ホテル業専門学校 (Professional Hotel Schools) がダマスカス、アレppo、ラタキアに設立される [国際協力事業団 1996: 35]	マッカにてマッカ事件 ・以後サウディアラビアとイランの関係悪化。マッカへの巡礼やマディーナへの参詣が一時的に行えなくなる

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1988		シリア、ラッカのウワイズ・カラニー (Uways al-Qarani) 廟とアブー・イブン・カアブ (Abū ibn Ka'ab) 廟の改築工事開始 (イラン政府による全額援助) [Ababsa 2001]	イラン-イラク戦争終戦
	TRANSTOUR からサイイダ・ザイナブ廟周辺の観光開発・管理が新たに設立された子会社のサイイダ・ザイナブ観光・参詣会社に移転される	シリア、観光審議会決議100号 (11月3日)・207号 (12月11日) ・サイイダ・ザイナブ観光・参詣会社設立 ・TRANSTOUR の傘下会社 ・シャリーフ評議会 (25%)、TRANSTOUR (12%)、ASCTE、アラブ公共開発会社、アラブ銀行会社 (SUBAR)、イラン・イスラーム共和国ハッジ・ズィヤーラ機構が出資を行う ・周辺地域の観光インフラの整備・管理 ・イランからの参詣ツアーのマーケティング、運営を独占的に運営 ・サイイダ・ザイナブ廟管理委員会と連携 [al-Mawsem 1996: 306-307; JICA 1998: 85-86]	
1989		レバノン、ターイフ合意 (10月) ・レバノン内戦終結	ホメイニー死亡 (6月3日)
1990	2本目のミナレットが完成 [Murtaḍā 1996: 148]	サイイダ・ルカイヤ廟改築 (シリア・ワクフ省とイラン政府の協力) ・改築資金はイランが全額援助 ・以後シリア国内にあるシーア派関連の参詣地がイランの寄進により次々と改築されていく [Ababsa 2001; Pinto 2007]	イラク、クウェートに侵攻 (湾岸危機)
1991	礼拝所の完成 [Murtaḍā 1996: 148]	シリア、法令10号「新投機法」(5月) ・国より認可を受けた企業は以下の優遇措置を受けることができる ①輸入資機材の免税 ②法人所得税及び固定資産税の免除 (生産開始後5-7年) ③外貨口座の開設及び利子所得の許可 [アジア太平洋観光交流センター 1998]	湾岸戦争 ・戦争終結後、イラク国内のシーア派がフセイン政権に対する反乱を起こすが、軍によって鎮圧される。鎮圧後、シーア派勢力は活動の拠点を国外のロンドンとダマスカスに移す

西暦	サイイダ・ザイナブ廟・シット・ゼイナブ	シャーム (シリア地方)	シャーム外・世界情勢
1992	レバノンのシーア派ウラマー、ファドルッラーがザイナブ廟周辺にハウザを設立 [Mervin 1996]		
1993-94	イラン人のアッバース・ハサン・ファルーシュ ('Abbās Hasan Farūsh) より新しいダリーフを囲う柵が寄進される [Murtadā 1996: 145]		
1994		サイイダ・ルカイヤ廟、改修工事終了 [Ababsa 2001]	
		ラッカの廟建設工事終了 [Ababsa 2001]	
1995	サイイダ・ザイナブ・アカデミーの設立 [Mervin 1996]		
2000		シリア、ハーフェズ・アサド死去 (6月10日) ・次男のバッシヤール・アサドが大統領職に (7月10日)	
2001			アメリカ同時多発テロ (9月11日) ・世界全土で観光客が減少。中東地域への観光客が激減
		観光大臣、サアダッラー・アーカー・カラア (Sa'ad Allāh Āghāh al-Qala'at) に (~現在まで)	
		シリア、新たな「全国観光振興計画」を制定 ・1996年より日本政府に依頼し、JICAがマスター・プランを作成 ・2015年までの観光開発プラン ・プロモーション活動と文化観光に焦点を当てている [JICA 1999; 国際協力機構 2004; シリア・アラブ共和国観光省 2008]	
2002	ザイナブ廟近くにクウェート資本のサフィール・インターナショナル・ホテル・マネージメント会社 (Safir International Hotel Management) とサイイダ・ザイナブ観光・参詣会社によって4つ星ホテル、サフィール・サイエダ・ゼイナブ・ホテルが建設される		
2003	イラクのシーア派難民が大量にシット・ゼイナブに流入		イラク戦争 (サッダーム・フセイン政権崩壊)
		シリア、新内閣が結成	
2005		シリア、レバノンより軍を撤退	
2006		南レバノンにてヒズブッラーとイスラエル間での戦争	
2007	参詣者数年間200万人規模 [Zimney 2007]		